注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
エンゲキ～その日確かに僕はいた～

【作者名】
勝山也利

【あらすじ】
「目立ちたくない、頑張りたくない、人並みでいい、、、けど、、、本当にそれでいいの？」
誰もが抱えていることなかれ主義を打ち破るためのお話です。

さあ役者は揃った
始めよう最高の喜劇を
!!!!!!!!!

～これを読み終えた時確かに貴女はそこにいます～

登場人物紹介

主要登場人物紹介

中山実瑠（なかやまみる）

１６歳の内気な女子高生。

五日市東高校の新入生で勉強は並（しかし現代文だけはすこぶる良い）

誰の目にも留まらず、誰の記憶にも残らないをモットーにしていたが

部活紹介の時の演劇部で演技をしていた公斗に魅せられ演劇部に入部することに。

誕生日は３月２７日

好きな物は干したての布団の匂い、プリン

嫌いなものは目、北川先輩

堤下公斗（つつみしたきみと）

１８歳の社交的な青年。

五日市東高校の看板役者。

自称理系だが実瑠同様現代文だけがすこぶるできる。

誰の記憶にも残らなくても良いけど誰かの心の中に

希望を生み出せたらいいという矛盾したポリシーを持っている。

よく弁当のおにぎりを潰される。

誕生日は８月１０日

好きな物は台本、雛斗とやるキャッチボール

嫌いな物は遅刻、諦め、阪神タイガーズ

林雛斗（はやしひなと）

１８歳の眼鏡

三年生の中で１番判断力があり成績も上位。

五日市東高校の舞台監督でいわば参謀司令官的立ち位置。
気配りが上手く、話も面白いので一年生からは人気。
しかし作業中は一転して鬼監督と化す。
面白いくらいプライベートに関する嘘が下手。
誕生日は４月６日。
好きな物はＴＨＥ　ＳＴＡＦＦ、メンチカツサンド
嫌いなものは遅刻、やる気のないやつ、フィッシュカツサンド

～その他の部員～

［１年］

江藤イカリ（えとういかり）
五日市東高校文系特進クラス。
演劇がやりたいというストレートな理由で演劇部に入部。
自分の事を過小評価するくせがある。
母もかつて演劇部員である。
なんちゃってロマンチスト。
誕生日は１２月２３日
好きな物は演劇、女の子、差し入れ
嫌いな物は他人のネガティヴな発言、フルーツ

有馬喜穂（ゆうまきほ）
五日市東高校の一年生でミュージカル集団「笑顔」の元団員で、演技をすると人が変わる。
見た目はヤンキーだが一年生の中では実瑠以上に礼儀正しい。
頭がパンクすると顔を真っ赤にして考えるのをやめる。
しかしお菓子を食べると元に戻る。
誕生日は２月２４日
好きな物はピンク、クマの筆箱
嫌いな物はネガティヴな発言、負け

七浦六美（ななうらむつみ）

五日市東高校の理系特進だが成績が凄まじく、周りから裏口入学だと噂されている。
現在も「笑顔」に所属しており、喜穂とは同期でありライバルである。
不思議ちゃん。
誕生日は5月3日
好きな物は紫、イケメン
嫌いな物は自分が嫌いになった物

林達成（はやしたつなり）
五日市東高校の文系特進クラス。
歴史とラーメンと笑いをこよなく愛する謎の男。
喘息持ちのくせにやたら走る。
何故か金回りはいい。
誕生日は１２月１６日
好きな物は歴史、ラーメン
嫌いな物は言い訳、マヨネーズ

松坂俊太（まつざかしゅんた）
のり、テンション、考えている事のすべてが他の人の斜め上を逝っている男子生徒。
鉄道おたく。
消去法で演劇部に入部した。
やる気は人一倍ある。
誕生日は１０月３１日
好きな物は野球観戦、鉄道カタログ収集
嫌いな物は説教、勉強

元素1

～～～うわ最悪あいつだよ～～～

～～～ホントだ～～～

～～～あいつさ、この前も表彰されてたよね。しかもまたあれで。～～～

～～～「、、」～～～～

～～～つかさぁぁ、あんなに賞もらっていい子ぶって何がしたい訳？～～～

～～～目立ちたいだけじゃね？～～～

～～～そうそ。だってあいつ〇〇〇以外とりえないじゃん～～～

～～～「(違うよ!!!わたしは、、、わたしはただ)」～～～

～～～たしかにわかるぅぅ。あいつあれがないとホントただの空気だもんねぇぇ～～～

～～～「(!!!)」～～～

～～～ちょっとそれ空気に失礼じゃない？（笑）～～～

～～～そうそう（笑）それにあいつが空気だったうちもう呼吸したくなぁい～～～

〰〰〰それな（笑）マジわかる。〰〰〰

なんで、なんでそんなこと言うの？
わたしは、わたしは賞が採りたくてやったんじゃないんだよ。
目立ちたいからじゃないんだよ。
わたしは、、、わたしが〇〇〇をやるのは!!!!!!!!

〰〰〰ピピピピピピピピ〰〰〰〰
「ＺＺＺ」
〰〰〰〰ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ〰〰〰〰
「ＺＺＺＺＺＺＺぐべし!!!!!」
目覚ましが、まるで起きない私にいらだったかのように私の頭の上に落ちて、一瞬私の目から火花が出るような感じがした。
２０１１年４月６日水曜日。
おそらく中山実瑠史上最悪の目覚めである。
「しかも、、、またあの夢か」
小学生の時にあの陰口を聞いて以来、自分自身にとっての節目の時にあの夢を見る。
まるで戒めのように。まるで、、、あの時の誓いを忘れさせないように。
(わざわざ確認しなくてもいいのに。それに忘れようがないじゃんあんなこと、、、あんな)
１階に降りると味噌汁のいい匂いがわたしの鼻を通り過ぎて私の胃を直撃した。

部屋に入ると見慣れた同居人がエプロン姿で卵焼きを作っていた。
「あっ、みいねえ。ちゃんと起きれたんすね」
「ああ、りゅう君おはよう。」
そういってわたしは席に着いた。
机の上にはもうすでに味噌汁以外にも漬物や塩じゃけ、炊きたての白米が用意されていた。
「ちょ、ちょっとみいねえ!!!だめっすよちゃんと顔洗わないと。」
「こんなに美味しそうなもの見せつけといて先に顔洗えだなんて。
なんなの？拷問なの？りゅう君実はS」
「至極当然の注意っすよ。みいねえ今日から花の女子高生っすよ？
いいかげん自覚持ってしゃんとしてもらいたいっす」
そうなのだ。
4月6日、つまり今日がわたしにとって節目である理由は今日がわたしのハイスクールライフの
はじまりの日だからだ。
「そういえば佐代子おばさん入学式に来れるって？」
「ああ、母さんなら心配するなって言ってたっすよ。
『例え仕事が片付かなくても部下に丸投げする』って」
「、、、（たくましいなあ）」
ちなみにわたしとりゅう君こと速水竜太の関係を「女子高生と主夫系男子中学生の甘い同居生活」だと思っているんだったらそれは大きな間違いだ。
さきほども名前が出たがわたしはりゅう君と彼のお母上である佐代子おばさんの家にとある事情で
居候させてもらっている。
「とある事情って何だよ!!!」というつっこみにかんしてはスルーさせていただく。

食事もそこそこに、わたしはおろしたての制服に着替え、買ってもらったばかりの自転車にまたがった。
「それじゃりゅう君戸締りは頼んだわよ。」

「ういーっす」と言い敬礼をしたりゅう君はふと思いついたようにわたしに質問をした。
「そういえばみいねえは高校では部活にはいるんすか？」
やれやれまたそれか、と思ってわたしは彼の方を見て言った。
「そんなわけないでしょ。
わたしはね、余力をたくさん残して楽に普通にそこそこに生きたいのよ」

元素2

五日市高校。
偏差値５０強のいたって普通の高校だ。
普通科、特進と別れており、わたしは普通科に入った。
強豪の部活は演劇部とバスケ部の２つ、進学率もそこそこの超がつくほどの平均的な学校である。
強いて長所を挙げるとするなら徒歩五分圏内に少ししゃれたケーキ屋があるくらいだ。
自分の母校になる学校の印象がこれだけというのも寂しいものがあるが、事実なのだからしょうがない。
もっとも唯一の長所であるところのケーキ屋でさえ利用する予定は無い。

では何故そんなに地味な高校を選んだのかと問われれば、これも理由は簡単で余力を残したいだけなのである。変に進学に気合を入れていたり、部活に力を入れている学校へ入っては嫌でも努力せざるをえない。
「(まっ、中途半端なわたしにはこんくらい中途半端なのがお似合いよね。」
そんな希望のかけらもないようなことを考えながら自転車の鍵をかけていると「君1年生、、だよね?」という男の人の声がした。振り返ってみるとそこには眼鏡をかけた中くらいの背をした男子生徒が立っていた。ジャージを着ているということはなんらかの部活の勧誘にきたのだろう。しかも漫画でしか見たことのないような厚いレンズに渦巻きのような模様のある眼鏡をつけていた。
「まあ、はい」とわたしは当たり障りなく答えた。
「そか。俺演劇部の二年なんだけどさ、明日の放課後に体育館で劇やるからよかったら観にきてよ。」
「なんでですか?」

「え？いやなんでって、この時期にジャージ着た文化部が公演の宣伝してたら目的は1つだけっしょ」
「、、、分かりました。募金活動ですね」
「ボランティア!!!?」
流石は演劇部。なかなかきれのあるつっこみをしてくれる。
しかし、よりによって演劇部か、、、ややこしいのにつかまってしまったな。
でもまあここは中学で培ってきた大人の対応スキルを発揮しておこう。
「あなたの言いたいことは分かりました。善処しておきます。」
「政治家かよあんたは。でもいいキャラしてるよ。良い役者になれるかもしれないな。」
役者と言われた時、夢で聞いた女子たちの笑い声が頭の中でこだました。
「、、、すみません、教室行かないといけないんでそろそろ」
「おっ、そうだよな。引き留めて悪かったな。それじゃたのんだぜ!!!クラスにもひろめといてくれよ」そう言って彼はわたしに宣伝用の広告を渡した。
広告にはタイトルとともにキャッチコピーのようなものが書いてあった。

[元素〜まだ始まってもいない小さな原石へ〜]
「、、、発想にひねりがない」これが広告に対する感想だった。
わたしは一通り目を通した後そのまま丸めてゴミ箱に捨てようと思ったが、流石に失礼だったのでスクバに押し込むことにした。

結局佐代子おばさんは来れなかった。(その代わりに埋め合わせとして今度外食に連れてってくれるらしい)
入学式を終え一年生一同は各教室に入った。

わたしは自分のホームルームとなる1―6の教室へと入り、当たり障りのない自己紹介をして席に着いた。全員の自己紹介が終わった後の担任の流暢な英語での自己紹介や諸連絡を聞き流し、ようやく帰宅を許された。そのまま帰っても良かったのだがこれから3年間お世話になる図書室の蔵書の確認と司書の先生に拝謁するという最重要任務があったので一人学校に残った。

五日市高校の図書室はクラスのあるA校舎とは違うB校舎の3階にある。時刻は11時ほどで風が少なく、春にして暑めの日だった。

「ああ、暇だなぁ～」

登校初日からこんなに暇だなんて先が思いやられる。この際2、3人は友達をつくろうかという邪念が生じたが今朝の夢を思い出し、すぐにその考えは消えうせた。

なんの音もない階段をのぼっているとグラウンドから運動部の掛け声が聞こえてくる。おそらく皆自分の、チームの目標にむかって一生懸命に練習しているんだろう。自分の弱さを誤魔化すために、チームメイトの弱さをかき消すために皆が皆必死に声を出しあって練習に励んでいるのだろう。そんな同世代の姿を想像すると、少し羨ましく、妬ましくもあった。しかし同時に努力して報われるのは結局は1チームしかない。そんな賭けのような世界なのにあんなに本気を出すなんて馬鹿げている。というように思って自分を納得させようとする自分もいるのだ。こうやって悩むくらいならやはりわたしはなにもやらない方が良いのだ。ただ一人静かに過ごす場所、静寂で誰もわたしを見ない、誰もわたしを見ない、誰も、、、誰もわたしに魅せられない。そんな高校生活で、、、、

良いんだ

Ａ塔とＢ塔を繋ぐ渡り廊下の戸に手を置くと男子生徒の声が聞こえた。だれかと話しているようなかんじなのだが、しばらく聞いてみたところどうやら外にいるのは一人だけのようだ。

「、、でかい独り言だな。」

こんな時間に残って渡り廊下で堂々と独り言をいうなんてわたし以上の暇人だな。やれやれまさか入学初日からこんな変な人に出くわすとは思わなかった。遠回りになるが反対側の渡り廊下を使うか。

遠回りと言っても1分もかからない移動距離を移動しわたしは渡り廊下の戸を開けた。戸を開けた瞬間わたしは突然足が固まってしまった。唐突すぎてこれを見ている諸君は混乱するだろうが足が固まったわたし自身も困惑しているのでおあいこさまだ。しかし、しばらしくしてわたしはこの出来事の理由がはっきりと分かった。戸越しで聞いた時はそうでもなかったが、今外に出たことにより独り言だと思っていた声が何かの台詞であることに気付いたのだ。しかもその声は、１００m近い距離があるにも関わらずまるで風のように空気を伝ってわたしにリアルタイムで、まるですぐ隣で聞いているかのような臨場感をわたしに感じさせた。久しく感じなかった感動をわたしは感じさせられたのである。わたしはこの声の主の顔を見たくて左をむくと一人の背の高い薄茶髪のジャージを着た男子が腰に手を当てて立っていた。そして服はどこかで見覚えのあるジャージだった。

「あれは確か、今朝のぐるぐる眼鏡先輩（仮）の!!」

ということは彼も演劇部員ということなのだろうか。演劇部。そこでわたしは今朝ぐるぐる眼鏡先輩（仮）からもらったチラシをスクバから出した。

「明日の、、３時か」

劇自体に興味はないが、声の主を知るという目的で観ても罰は当たらないだろう。

それからわたしは彼が帰るまでずっと彼を、彼の声を観ていた。まさか彼が夜の7時までそこで声出しをするつもりだとは知らず最後まで、、、

元素３

～～～～ピピピピピピピピ～～～～

アラームが鳴るころにはわたしは既に起きていた。というより小６の修学旅行の前日以来初となる徹夜で寝ていなかったのである。しかも理由が、、、

「、、きれいな声だったな」

結局昨日は渡り廊下で演技の練習をしていた男子生徒の声に聴き入ってしまい、彼が帰るまで学校にいた。しかもその後その生徒に話しかけるか話しかけないかと迷っていつつ下校している彼を尾行してしまった（!!!?）。そして家に着くころには時計の分針は９と１０のあいだにあった。

その後食事をとらずに布団へ直行したがあの声が何故か頭にこだまし、考え事をしていたら朝になってしまった。

足取りも危うく、一階に行くとジャムの甘い匂いがした。またりゅう君が作っているのだろう。

「あっおはようっすみいねえ。今朝は洋食っすけどいいすかね？」

「ああ。なんでもいいよ。てか昨日結局晩ご飯食べてないからパン一枚余分に焼いてもらえる？」

「了解っす。」

そう言ってりゅう君は袋に入っているパンを一枚トースターの中に入れた。

「ていうかみいねえ、登校初日にも関わらず９時過ぎに帰ってくるなんておかしくないすか？」

朝から痛いとこをついてくるなこの高校生は。

「ああ、、閉館ぎりぎりまで図書室にいたからだよ。」

「夜の９時前後まで開いてる学校の図書館なんてあるんすか？」

「い、いやぁ司書さんとラノベについての語り合いで盛り上がっちゃってさ。」

「ふーん」
　と言ってりゅう君はこの話題を終えた。まあ、わたしが友達を作らないのを知ってるだろうから夜遊びの疑いはかけられていないだろう。
「、、、みいねえ今日身支度は早いんすね。しかも着替えてあるし。」
「ああこれ？実は着替えてなかったりして、、」
　と言った瞬間りゅう君の表情が変わった。女を見る目から雌を見る目に。
「、、、実瑠さん」
「は、はヒ」
　敬語!!!?これはやばいやつだ。
「あなた一日着てた服にどれほどの雑菌がついてるか理解してる？」
「、、、知らないです」
「しわのついた服を着た女子が受ける無意識のストレス指数の高さはお分かり？」
「、、、分からないです」
「俺に言うことは？」
「すいませんでした!!!!!」
　２０１１年４月７日木曜日。天気は晴れ。高校生活２日目の朝は年下に９０度傾斜のお辞儀をすることで始まった。

　始業２日目だが、校庭にはたくさんの部活の部員たちがビラ配りのために立っていた。何人かの勧誘を断りようやく自転車置き場にたどり着いた。
　下駄箱まで行くと玄関の戸にビラを貼っている男子生徒がいた。眼鏡を額に上げていた。
［同志求む　　ボードゲーム部］と書いてある。どうやら部を新設しようとしているらしい。チラシを見ているとチラシ貼りをしていた生徒と目があった。

「興味ある？」
「え？」
　わたしは周りを見た。まさか一般の男子生徒が初対面のわたしに話しかけてくるなど
「いやいや君だよき・み。他にだれもいないだろ？」
　わたしだった。まさかだ。
「いや別にあなたを見てたんじゃないですよ。あなたの貼ったチラシをみてたんですＹＯ」
　何故かけんか腰の口調になってしまった。しかも語尾噛んだし、、、
「え？まじで!!!?君ボードゲームに興味あんの？」
「いや興味はないですけど、ただ部活を立ち上げようとする人がホントにいるのかぁって思って。」
「ああ、そうだな。俺も実は昨日までそう思ってた。」
「え？昨日までって考えがあって部活立ち上げたんじゃないんですか？」
「考え？んなもんないよ。てかまず昨日入学したばっかだから部結成届すら出してねぇ」
　、、、ナニイッテンダコノヒトバカジャナイノ？
「ていうか1年だったんですか？」
「おお。靴はきかえようとしてたとこをみるとあんたもだろ？てか同い年なら敬語やめてくんね？
　なんかこそばい。」
　初対面の女子にタメ口で話せというのも無理な話である。
「てかまぁここで会ったのもなんかの縁だろうし名前教えてくれよ。名前知ってた方が勧誘し易いし」
「何でそうなるんすか。そもそもわたし部活とかには興味が。」
「なくてもいいからさ。それに俺普通科にも知り合い欲しかったし。」
「特進なんすか。」
「おお。分特だよ。ってんなこたいいから名前名前。」
　何故こんなに名前を聞きたがるんだ。ナンパなのか？
「1―6中山実瑠」

「中山か。俺は林達成。1―8だ。よろしくな!!!」
よろしく、というがわたしとしてはもう関わりを持つ気はないのだが。

朝の謎の絡みから4時間23分後の12時45分、つまり昼休み。
わたしは図書室で菓子パンを食べながら考え事をしていた。
登校二回目にして図書室で孤立というのも悲しいものではあるが、教室で衆目にさらされながら食事するよりはましだ。
さて考え事というのは今日の放課後の演劇部の公演に行くか否かということである。別に劇の中身に興味があるわけではない。ただ、渡り廊下で練習をしていたあの人の声がどうしても忘れられないのだ。何故こんなにも声に惹かれたのか分からない。いや、、分からないのではなく分かりたくないのかもしれない。もしも分かったら、、わたしはまた声を出したくなるだろうから。
それでもどうしてもわたしは彼の声が聞きたかった。
「、、なんでこんなに悩んでんだろ。」
もともとこんなに悩まないためにこの学校を選んだのに。めんどうくささから解放されるために孤独をえらんだのに。
「ほんと、、らしくない。」
もうちゃちゃっときめてやろう！こうなったらもうやけだ!!!

わたしはふところから鉛筆を出した